

ふるさと再発見！

vol.

4

ほうぼわかやま

HOUBO
WAKAYAMA

FREE

巻頭
特集

和歌山の先見方

幕末の紀州が生んだ改革

●紀州の歴史・文化

山川・海が育んだ

生鮮と保存の食文化

●散策

ゆつたり、

ゆあさの町散策

●施設紹介

うるわし館

紀州漆器伝統産業会館

●団体紹介

雑賀衆と雑賀孫市

和歌山人の先見力

幕末の紀州が生んだ改革

― 当時の和歌山には睦奥宗光・津田出・浜口梧陵など

先見性に富んだ人物が多くいた。

なぜ、和歌山にそれだけの人物がいたのか―

2009年は政治・経済ともに大きな変化のあった年だった。日本の歴史において大きな時代の転換期といえ、武士の時代から近代へ変化した幕末から明治維新。当時の和歌山の人々は激動する時代をどのように受け止め、生きてきたのだろうか――
和歌山市立博物館の館長を勤める寺西貞弘氏に
お話を聞いた。

「今、時代は閉塞している。だから何かをやりたい」という気持ちは誰にでもある。でも、その「何か」をするためには思いつきではだめだ。新しいことをするための土台となる豊かな学識と知識があつて初めて「できる」という確信が出てくる。

例えば、江戸時代のベストセラーに『紀伊国名所図会』というものがある。江戸後期にはさまざまな地域で『名所図会』というものが作られたが『紀伊国名所図会』は抜

群に出来がいい。なぜなら「そこがなぜ名所なのか」「本当に名所なのか」ということを資料を元に実地で調べている。そうすることで他の地域の名所図会にはない詳細かつ精確な名所図会ができていくわけだ。これは戦後の近代歴史学の手法を百数十年早く取り入れていることになる。

人物では国学の本居宣長、医学の華岡青洲（世界で初めて麻酔薬を使った手術に成功）、自然科学の畔田翠山（水棲動物百科には当時他に

類を見ないほどのサンプルを挙げている）など江戸後期には優れた文化人が和歌山から輩出されている。

このように高度な学術水準が和歌山にはあった。その知識に裏打ちされた先見性だから素晴らしい。

― 大藩だからこそその 高い学術水準

江戸後期の城下町和歌山は幕府直轄の江戸・京都・大阪の3都市、そして金沢・名

江戸時代のベストセラーを再現!!

城下町の風景

～カラーでよむ『紀伊国名所図会』～

額田雅裕 解説・芝田浩子 彩色

A4版 / オールカラー 64ページ / 1,050円

江戸時代の和歌山の風景や風俗を絵図と解説で記した地誌書『紀伊国名所図会』をカラー彩色で再現。現在の地図や写真との比較により、分かりやすく解説している。

お問い合わせ先 / ニュース和歌山

電話 073-433-4882



県内の主要書店で絶賛発売中



紀州藩が設立した藩校。藩士やその子弟が主に儒学や国学を学んでいた。
画：岩瀬広隆「学習館全景」（城下町の風景—カラーでよむ『紀伊国名所図会』）

和歌山には造り酒屋が多い。当時、酒は贅沢品だったが、それを買う人も多いため酒屋ができたのだ。

出版文化にしてもそう。その日暮らしをしている人が本など買えない。先の『紀伊国名所図会』もベストセラーになるということは、それだけ多くの庶民がこの本を購入していたというわけだ。豊かであるからこそ、より高度な学問に接する機会が生まれ、秀でた人物も多く育った。

— 維新前夜の紀州藩 —

幕末の和歌山は微妙な立場にあった。

徳川を名乗る家は全部で七家ある。まず徳川将軍家、次に御三家と呼ばれる尾張徳川家・紀州徳川家・水戸徳川家、そして御三卿と呼ばれる田安德川家・一橋徳川家・清水徳川家。その中で最も都（京都）に近いのは紀州徳川家だった。

具体的には「天下の台所」

大阪の堂島の米相場がわずか1時間後には手旗信号で和歌山に伝わった。つまり京都・大阪の尊王攘夷思想^{そのうじょうい}を一番敏感に察知していたのが紀州徳川家だった。もう徳川家の時代ではない、しかし御三家として徳川家を支えなければいけない…。そういう自己矛盾の中で幕末を過ごすわけだ。

14代将軍徳川家茂は紀州徳川家出身だ。この家茂は幕府軍として長州征伐を行った。つまり自己矛盾を抱えたまま、徳川家を守るために尊王攘夷思想を討ちに行っていたわけだ。しかし、大村益次郎・高杉晋作率いる奇兵隊に惨敗した。

兵隊に惨敗した。

和歌山市立博物館館長

寺西貞弘氏 （てらにしさだひろ）

1953年4月大阪府摂津市に生まれる。1978年3月関西大学文学部史学科卒業（日本古代史専攻）。1989年3月関西大学大学院博士課程後期課程修了、文学博士。職歴—1984年11月和歌山市立博物館学芸員。のち、同館学芸課長、副館長を経て2002年4月和歌山市立博物館館長（現在に至る）専攻は日本史。主な著書に『古代天皇制史論』（昭和63年、創元社）・『目で見える和歌山市の百年』（平成6年、郷土出版）・『古代熊野の史的研究』（平成16年、塙書房）ほか。



敗戦した紀州藩は何をしたかという、兵制改革を行うことになる。そこで紀州藩が目を付けた官僚が津田出だった。

奇兵隊は画期的、四民平等の軍隊だといわれるが志願兵だった。これに対し、津田出の考えた兵制改革は徴兵制だった。

考えてみてほしい、まだ幕末は武士の社会なのだ。後年、明治政府が徴兵制をしくことになるが、武士達からは猛反発を受けた。それを明治維新前に紀州藩は武士社会の中で徴兵制をしいてしまったのだ。

「海外の事情を良く知り、封建制度の限界も知り、それに対抗勢力に対しても明確に説明できる」

それだけの能力の持ち主が和歌山にはいた。だからこそ、それを実行できたのだ。

そして最終局面で自分たちの進むべき道を正確に見つ

け出し、まっしぐらに進んでいったわけだ。

維新後の紀州藩

廃藩置県によって御三家のうち水戸徳川家は茨城県、尾張徳川家は愛知県、紀州徳川家は和歌山県になった。

「茨城」「愛知」の地名は各藩の郡名から選ばれた。また和歌山県を名草県（「名草」は当時の紀州藩の郡名の一つ）とする意見もあったという。

しかし城下町和歌山の都市名を県の名前に選んだ。それだけ当時の政府からも高く評価されていたのではないだろうか。

維新前は8万人ほどいた紀州藩の人口も維新後には5万人ほどに減ってしまった。

地租改正によって土地に多額の税がかけられたわけだが、当時の武士はとても広い土地を持っていたため郊外に

移る人たちが多かった。また、有能な人材の多くは新政府に抱え込まれてしまった。これが明治維新後、和歌山の活気を奪った一因なのではないかと考えられる。

明治政府は薩長藩閥政治と呼ばれる、大臣クラスは明治維新の立役者である薩摩・長州の人間で占められていたが、明治政府が行ったおもな施政は廃藩置県・地租改正・徴兵制など。これらを事務的に処理する有能な官吏は江戸時代にこれら先進的な改革を行った紀州藩の官僚だった。

そのため睦奥宗光・津田出や旧幕府軍の優秀な人材が新政府の官僚に採用されていたのである。

明治維新を支えたもの

アジアの中でも植民地にならなかった数少ない国が日本。

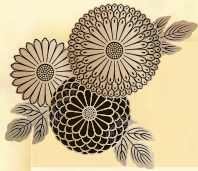
蒸気機関車・電話など新しい文明に触れたとき驚くだけなら誰でもできるが、日本には驚くだけでなく、分析して自分のものにし、改良する能力があった。それができたのも江戸時代には、すでに豊かな学識があつたからこそだ。

欧米人が日本に來たとき驚くことは、日本人の識字率の高さだった。当時、ヨーロッパでの就学率は6割程度、日本の就学率は9割を超えていた。「これほど知的で礼節にかなった国は他にはない」と欧米人は日本を評していたという。

「明治維新は文明開化だ。江戸時代は因習に満ち、文明の光の届かない暗い時代」……そういった認識があるが、江戸時代の優れた学識がなければ明治時代は来なかった。「江戸時代をもっと見直すべきだ」と最後に寺西氏は熱く語った。



和歌山城南側にある岡公園にたたずむ睦奥宗光像。



津田 出
つだ いづる
1832年—1905年

明治政府軍の礎をつくりだした男

慶応元年、紀州藩は幕府軍の主戦力として長州征伐に参加し、高杉晋作や大村益次郎率いる近代化された奇兵隊に大敗北を喫する。藩主徳川茂承は徹底した軍隊の近代化が必要と感じ、津田出を執政大夫^{※1}に抜擢した。津田は身分に関係なく集められた人々が銃で武装する「銃隊」を創設したが、庶民と同列に扱われることに不満をもった藩士達の圧力により罷免される。しかし、王政復古宣言^{※2}により幕府は崩壊し、再び執政として起用された津田はかつての銃隊を徹底させ、明治2年に日本で初めての徴兵制度に基づく交代兵を組織し、新政府軍の礎をつくりだした。



陸奥 宗光
むつ むねみつ
1844年—1897年

「カミソリ」とよばれた外務大臣

メキシコ合衆国と交わした日墨修好通商条約^{※3}という、日本が外交史上諸外国と締結した最初の平等条約により、諸外国との不平等条約に悩んでいた近代日本の外交指針となった。その条約締結を指揮したのが、陸奥宗光である。宗光は紀州藩士の6子として生まれる。神戸海軍操練所を経て海援隊に入り坂本竜馬と行動を共にし、竜馬をして「(刀を)二本差さなくても食っていけるのは、俺と陸奥だけじゃ」といわしめるほどの才能があった。維新後、ヨーロッパで近代国家の在り方を勉強し、帰国後駐米大使に任じられた。

その後外務大臣となり、日墨修好通商条約、日英通商航海条約^{※4}、下関講和条約^{※5}など、数多くの条約締結に尽力し日本の利益を確保することに奔走している内に剃刀大臣の異名がつくことになった。



浜口 梧陵
はまぐち ごりょう
1820年—1885年

イギリス人文学者小泉八雲が「生ける神」と世界に紹介

ヤマサ醤油の当主で、勝海舟や津田出と交流があった梧陵を世界的に有名にさせたのが、安政の大地震後に紀伊半島を大津波が襲った際の勇敢な行動だった。

「西北ノ空特ニ暗黒ノ色帯、アタカモ長堤ヲ築キタルガ如シ」

大地震の翌日に高台から海を眺めていた梧陵が大津波を確認した瞬間、稲刈り後の稲むらに火を放った。注意を集めることにより村人を高台に誘導し、数多くの人命を救ったのは梧陵の機転である。大津波の後、梧陵は災害復旧に当たったが、地震前の村に戻すのではなく再度大津波が襲っても村に被害をおよぼさないよう、延長600メートルの広村堤防^{※5}を築く。私財を投げ打って復興に尽くした梧陵は村人から「生き神」とたたえられ、稲むらの火の話を小泉八雲^{※6}がイギリスに紹介し世界的に有名となった。

- ※1 執政大夫……………藩主に代わり、政治を執り行う家老に相当する官職。
- ※2 王政復古宣言……………明治天皇が「王政復古の大号令」を発令することにより、新政府の成立を宣言した。
- ※3 日英通商航海条約……………不平等条約改政交渉の結果、ようやく達成できた最初の改正条約で、領事裁判権が撤廃された。
- ※4 下関講和条約……………1895年に日清戦争後の講和会議にて、日本と清の間で調印された講和条約の通称。
- ※5 広村堤防……………和歌山県広川町に現在も残っている防浪堤防。浜口梧陵墓とともに国の史跡指定されている。
- ※6 小泉八雲……………日本人の妻を持ち、日本に帰化したイギリス人。小説家・随筆家。



山・川・海が育んだ

■取材協力
和歌山大学 経済学部 市場環境学科 准教授
フウドわかやま理事
鈴木 裕範
■写真提供 フウドわかやま

生鮮と保存の食文化



**航海技術の
発達が生んだ
食文化**

和歌山県は日本の食文化に深く関わっている。

江戸時代、航海技術の発達により、和歌山県の食文化は大きく発展する。紀州は海路運輸を通して江戸や大阪、京都と直結し、最新の文化、情報をキャッチしていた。

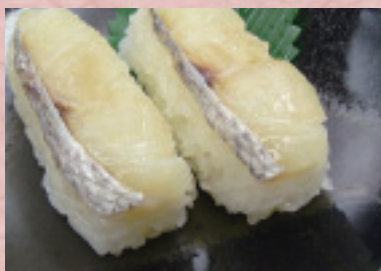
また、海国を背景に新たな漁法の発明によって様々な魚が獲れる様になった。さんま漁、かつおの一本釣り、ケンケン漁は和歌山県がいち早くハワイの漁法を取り入れたと言われている。

魚を獲ることに優れていた紀州人は、長く美味しく食す方法を発明していった。その調理方法は今日の和歌山県で食されているお寿司に見ることができる。

紀北、紀中地域の代表的な



あゆ寿司



小鯛雀寿司



さば寿司



さんま寿司



なれ寿司



じゃこ寿司

龍神村の 柚べし

ゆ

柚べしとは柚子の中身をくりぬき、そこに味つけた味噌を入れ、それを干し熟成させて食べる料理である。全国各地でお餅風和菓子として存在しているが、龍神村で作られる柚べしはスライスして食せば酒一升飲めるといわれる程、酒の肴である。また、茶粥や温かいご飯のお供としてもおいしく食べられる。現在、「龍神は〜と」という女性中心のグループが村おこしの一環で作り、東京の伊勢丹にも出品している。かの有名書道家榊莫山氏の娘で、裏千家茶道家の榊せいこさんもお正月にはこの柚べしを食べに龍神に帰ってくるといふ。



寿司には、さば寿司、なれ寿司、小鯛雀寿司、はや寿司、柿の葉寿司、じゃこ寿司、あゆ寿司がある。これが紀南地域になるとさんまとあゆが中心になる。紀北、紀南の両方で食されるあゆ寿司は、調理の仕方が変わる。紀北地域では甘露煮風に炊いてご飯にのせ寿司にしているが、紀南地域ではなれ寿司にして食べる。特に古座川には平安時代に書かれた「延喜式」で朝廷に献上したあゆのなれ寿司に類する寿司が今も残っている。

秋、冬の和歌山で獲れる魚は格別おいしい。だが、春先になると旬を過ぎ味が落ちてしまうので、代わって海藻類の寿司がでてくる。和歌山市内ではわかめ寿司、田辺市ではひとめ寿司、串本にいくとごく一部の地区で春先限定でしか食べられないあんろくめ寿司がある。あんろくめ寿司は地元の家庭で作られていたお寿司で、ツルツルとした喉越しがとても良い。

風土が もたらした 二つの食文化

このように和歌山県ではその旬の食材を新鮮なまま食す文化と、山に運んで食べられるよう、保存の効く調理をして食す文化がある。同じ素材を使いながらファーストフードとスローフードがあるのも楽しい。

山、川、海がある和歌山県の豊かな風土がもたらした食文化の特徴だ。和歌山県に生きてきた人々は、多くの食材に恵まれて、その食材を取る技術、おいしく食す方法を工夫してきた。和歌山県の食文化は、今日の日本の食文化の発展に大きく関わってきたといえる。私たちはそのことを知り、もつと自慢したい。



龍神は〜と

〒645-0525

和歌山県田辺市龍神村龍神165

TEL・FAX 0739-79-8068

営業時間10:00~17:00



はやなれ寿司



柿の葉寿司

ゆつたり、ゆあさの町散策

たつぷりのおしゃべりと、ゆつくりとした時間を

歴史深いのに気取らない、どこか懐かしさを感じさせる商人の町、湯浅。

今でもなお、江戸時代から昭和にかけての建物が当時のままの様子で立ち並んでいる。

この味わい深い雰囲気は、まるでタイムスリップしたような心地にさせてくれる。

足を止めてじつくりと町屋を眺めるのも、散策の楽しみ方のひとつ。それぞれの建築様式をよく見ると、時代によって少しずつ違った造りになっているのがわかる。

その時代を見分けるヒントは屋根瓦と軒下の高さ。江戸から明治にかけては、丸瓦が使用され、軒下は低く建てられている。大正以降になると波瓦に変わり、軒下は高くな

る。さらに総二階と呼ばれる二階部分もでき、建物全体が高いつくりになり、明り取りのために虫小窓が付けられたのだそうだ。

* * *

麴の香りに誘われて醤油や金山寺味噌の老舗ものぞきたくなる。どのお店も長い歴史を重ねているため、お店の方から貴重な話を伺うことができる。運がよければ、中も拝見できるかもしれない。

また、見逃せないのが小路^{しょうじ}である。通りを歩いていると、細い小路があらこちらで「こつちにおいで」と呼んでいる。ふらりと入ってみると、そこには人々の暮らしが広がっていて、のどかでゆるりとした時間が流れる。ここ

で暮らす人々もまた、私たちに温かく語りかけてくれる。

町では多くのボランティアの方々が笑顔で声をかけてくれる。甚風呂に続く小路には、

地元の方が運営する休憩所がある。ここでも、たつぷりとおしゃべりが楽しめて、美味しいお茶をいただくことができる。

趣深い町並みと人とのおしゃべりが相まって、この町は私達の心をほっこりと癒してくれる。これもまた古代より旅人が多く訪れる理由であり、これからもこの風景はきっと変わらず温かな形でここにあるだろう。



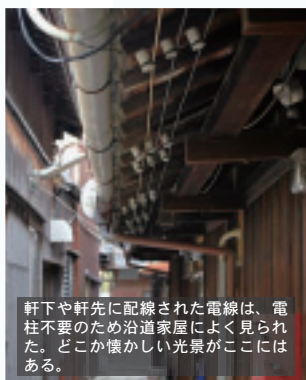
丸瓦は江戸時代～明治時代の建造物に使われた。



梁の上に立てた棟木を支える短い柱で、当時格式の高い家に見られた。「うだつの上がらない…」の語源になっている。



古い町屋や商屋に見られる建築様式で、風通しを良くするため、裏まで通り抜けの通路が設けられていて、吹き抜けにもなっている。



軒下や軒先に配線された電線は、電柱不要のため沿道家屋によく見られる。どこか懐かしい光景がここにはある。



ほうぼわかやま

醤油などをこの堀で船に積み込みし、日本各地に運搬していった。

北町通りには、古くからの醤油屋・味噌屋があり、今も醸造・販売されていて、通りを歩くと、香りがただよってくる。

江戸時代にあった民家を改装している。店内では時間がゆっくりと感じられ、疲れを癒してくれる。

湯浅湾で獲れた新鮮な旬の魚介類を販売している。お刺身を注文し、お隣の「北町茶屋いづく」さんで頂くことができる。

←おもちゃ博物館で、今も使われているレジスター

古く懐かしいおもちゃなど約5,000点を展示している。館長からは、楽しいお話が聞ける。
●開館時間 土・日・祝祭日の10:00～16:00
3月以降は、金曜も開館。

明治中期頃では珍しい3階建てで、当時は物見櫓から町並みを一望できたという。

アクセス
●車の場合
阪和自動車道 有田I.Cより約5分
湯浅御坊道路 湯浅I.Cより約5分
●電車の場合
JRきのくに線 湯浅駅下車

千年の時を経て、受け継がれる古き良き町並み

その昔、上皇や貴族の間で熊野参詣が盛んに行われ、室町時代後半には一般庶民もこぞで熊野に足を運ぶようになる。もとより山側を通っていた熊野街道は、当時湯浅が統治していた治安の良い海側へと移され、さらに大勢の旅人が行き交うようになった。この街道沿いには多くの御茶屋や旅館、商店がずらりと軒を連ね、長旅の疲れをゆっくりと癒す旅人で賑わいを見せた。

熊野街道の限界が発達して文化が生まれたと同時に人口が増え、次に発達したのが鍛冶町。この町では大工道具や鋳、兎など鉄を使った産業が主に栄えた。さ

らに北町では紀州藩の手厚い保護を受け、金山寺味噌の製造過程から生まれた醸造業が大きく伸び、幕末には醤油屋の数は九十二軒にも及んだ。今でもこの通りを歩くと醤油の深い香りがふんわりと鼻をくすぐる。

漁業が盛んだったことも、湯浅が栄えた理由の一つ。近海はもちろんのこと、北は北海道から南は九州まで日本各地の漁場を開拓していったのが、紀州の漁師。彼らは全国の大都市に湯浅の醤油を運び、その土地の物資を持ち帰ったことで湯浅はさらなる発展を遂げた。時を経て、今もこの町には『商人の町』の面影がしっかりと残っている。

取材協力 / 半邊宗五（はんぺんそうご）氏：湯浅ボランティアガイド協会世話人
湯浅町伝地区の素晴らしさを、伝え広めるため、語り部として活動がされている。 お問い合わせ：湯浅町観光協会 ☎0737-63-2525

伝統ある紀州漆器を現代に伝える（海南市黒江）

うるわし館

—紀州漆器伝統産業会館—

「ジャパン(japan)」…英語で漆器はこう表記される。陶器がチャイナ(china)とよばれるように、欧米では漆器が日本を代表する工芸品だ。

今回は、「うるわし館—紀州漆器伝統産業会館—」(海南市黒江)を紹介する。



漆器の歴史を

いまに伝える拠点

福島県(会津塗・石川県(山中塗・輪島塗)などと共に漆器三大産地の一つに数えられる和歌山県(黒江塗・紀州塗)。

「うるわし館」は、その紀州漆器発祥の地として400年以上栄えてきた黒江地区のシンボリック的存在だ。入口では、原料である漆が採取される「うるしの木」が出迎える。

きて、みて、まなぶ、

うるし工芸

館内ではパネルで、製造工程の新旧の違いがわかりやす



パネル展示 館内では古の生産工程が紹介されている

く展示されている。

古い道具や、江戸時代の黒江塗など歴史的に貴重な作品を実際にみて、伝統的な手工業の技術を学ぶことができる。

また、新しく開発された素材や新技術が紹介されており、紀州漆器に関する情報がいっぱいだ。

ふれて、かんじて、

うるし体験

また、漆器に金粉などで絵をつける時絵の体験教室(要予約)も開催され、休日には多くの人でにぎわっている。

販売コーナーでは、伝統的なものから、碗や盆などの日用品、アクセサリにいたるまで、古今の紀州漆器が陳列されている。

伝統工芸は、一度その技術を絶やしてしまうと、復活は大変困難だ。「伝統を守るべきところは守り、変えるべきところは変えて」時代から時代へと受け継がれてきた紀州漆

器を、実際に手に取り、触れてみてはいかがだろうか。

《うるわし館アクセス》



- 場所
和歌山県海南市船尾222
- 交通
JRきのくに線海南駅から和歌山バス和歌山マリーナシティ行きで5分、黒江下車、徒歩5分
- お問い合わせ
TEL.073-482-0322
<http://www.chuokai-wakayama.or.jp/sikki-k/index.html>
- 営業時間
午前10時～午後4時(休館日/毎月第2日曜日、お盆、年末年始)

《イベント》

下駄市 ■開催時期:毎年8月14日

黒江の漆器職人が盆休みで帰郷する際、下駄を新調する習わしがあった事が起源のお祭り。夜市市としては近畿最大規模で、約200軒の夜店が祭りを盛り上げる。

紀州漆器まつり ■開催時期:毎年11月上旬

呼び物の漆器問屋による漆器の特売はもちろん、食べ物の屋台なども祭りを盛り上げる。川端通りは歩行者天国となり、約6万人の人が握り出し物を求めて訪れる。

【体験】漆器時絵体験《要予約》TEL.073-482-0322

400年以上にもわたり熟成された、紀州漆器の伝統技を気軽に受講できる。

- 団体の方:平日・土・日・祝開催/午前10時～午後3時
(詳しくはお問い合わせください) ※10名様以上の団体のみ受付(3週間前までにお申し込みください)、3階の研修室使用 ※但し第2日曜日は除く
- 個人の方:毎週土・日開催/午後1時～午後3時 ※但し、第2日曜日は除く



和歌山が誇る伝統工芸

紀州漆器

①産地として

恵まれた風土

海南市黒江地区は、周辺に原料である木材が豊富であり、海辺に南向きの温暖で、漆の乾燥に適当な湿度を持った大気などが漆器づくりに適していた。

②ルーツと歴史

起源は、室町時代に黒江の村里で行われていた^{しふじわん}渋地椀づくりを始まりとする「黒江塗」だ。

その後、「根来塗」の技術も、

豊臣秀吉による紀州攻めの際に、黒江の地に伝えられたと言われている。

また江戸時代にはいり、庶民の需要が高まるにつれ、生産も盛んになった。

中期には紀州藩により保護育成が図られ、全国に「黒江塗」の名が知られるようになり、大いに栄えた。

近年は、旧来の手工業技術を守りつつも、一方で新技術・新素材の導入を積極的に展開

し、時代の流れに柔軟に対応している。電子レンジ対応漆器や器が滑りにくいお盆、塗りUSBメモリなど、新しい試みは枚挙にいとまがない。

③庶民の日用品で

あり続ける

日常生活で気軽に使えることが特徴だ。

製造工程はすべて分業で、それぞれ専門の職人の手によって作り上げられていく。

特に、塗り職人による卓越した「立塗」の技術によって、他の産地で通常おこなう研磨処理をせずとも美しく仕上げることができている。

「庶民の日用品」として手頃な価格で大量に生産するため、工程の簡略化と技法に様々な工夫がこらされたのだ。

素材にこだわらず、一定の品質を保つために考え出された技法が現在にも続いている。全体的にシンプルで丈夫。その潤いと艶は得もいわれぬ

日本人好みの深みがあり、心の落ちつく安らぎを与えてくれる。

④伝統工芸品として

紀州漆器は、400年以上の伝統があり、錬成され優れた技術が受け継がれている。1978年（昭和53年）2月には、通商産業省（現経済産業省）より「伝統工芸品」として指定され、和歌山を代表する伝統産業となった。

《新しい試みの数々》



バイクへの塗装の応用



電子レンジ対応漆器



根来塗 朱漆に黒漆が浮き出し模様になる根来塗。黒の中塗りの上に朱の上塗りを施し、研ぎ出して中塗りの黒を模様として浮き立たせている。



黒江塗 潤いと艶のある漆の光沢と、金銀の蒔絵の織りなす美の黒江塗。黒塗りの潤いと艶。その鮮やかで煌びやかな装飾とのコントラストに魅せられる。

《孫市の会》

戦国時代さながらの 鉄砲演武が大好評

和歌山にもいた、戦国最強のスーパーヒーロー

「雑賀衆を味方につければ必ず勝ち、敵に回せば必ず負ける」戦国時代、最強の鉄砲傭兵軍団「雑賀衆」が和歌山（現在の和歌山市周辺）にいた。その雑賀衆の頭領が「雑賀孫市」である。

その雑賀衆と雑賀孫市を題材に活動しているのが「孫市の会」だ。武者行列や鉄砲演武などをイベント出演して披露

している。この孫市の会のパフォーマンスは、県外からもイベント出演依頼が来るほど評判が高い。イベント出演の他にも、小学校の授業での講演や手作りの甲冑製作教室を開くなどの活動をしている。

現在によりがえった雑賀衆「孫市の会」は、和歌山を元気づけようと今日も甲冑を身にまとって。



武者行列(2009年食祭にて)



雑賀孫市のキャラクター「まこりん」



工作作業場の風景



鉄砲演武(2009年食祭にて)

【孫市の会プロフィール】

和歌山市周辺の活性化を目的に、戦国時代のヒーローである雑賀衆と雑賀孫市を現在に再現すべく立ち上がった市民団体。平成19年度に実施した「雑賀孫市で街おこし事業」以降、認知度をもっと高め、各イベント出演など多忙な日々を送っている。

- お問合わせ
TEL.073-423-3136
E-mail:saikashuu@magoichi.or.jp
- 孫市まつり公式サイト
<http://magoichi.fc2web.com/>
- 孫市の街まちづくり
<http://magoichi.blog9.fc2.com/>

【イベント】第6回 孫市祭 (まこいちまつり)

■開催時期:2010年 3月28日(日)

■場所:本願寺鷺森別院および周辺

孫市の会が、鷺森周辺を中心に鉄砲演武などを披露する年に一度の一大イベント。

クイズとアンケートで当たる!

クイズにお答え戴いた方の中から抽選で、「和歌山の風景～カラーでよむ『紀伊国名所図会』」を5名様にプレゼント!!

問題
「陸奥宗光」は通称、何と呼ばれていた?
①ハサミ ②カタナ ③カミソリ

※ヒント:本号のどこかに答えが載っています。

応募要項
官製ハガキ、又はメールにて①住所②氏名③年齢④性別⑤クイズの答え⑥本のご意見・ご感想を必ずご記入の上、ふるってご応募ください。
一次べ切:2010年2月末日(当選人数/3名様)
二次べ切:2010年4月末日(当選人数/2名様)

応募先/ハガキ:〒640-8464 和歌山市市小路153-1 紀の川ビル2F (株)ウイング「ほうば・クイズ&プレゼント係」メール:mail@w-i-n-g.jp

編集後記

民主党に政権が変わって初めて迎える新年であり、また、NHK大河ドラマ「龍馬伝」も幕末の政権交代期をテーマにしています。本誌の特集でも、幕末の動乱期の和歌山にスポットを当てると、素晴らしい人材を輩出した豊かな和歌山が浮き彫りになりました。その末えいである私たち、自信を持って、前向きに変われる年にしたいですね。

おかげさまで本誌も今号で4号目、創刊2年を数えました。何もないところから新しいものを生み出した熱意も思い出に変わりやすいころでもありますので、あらためて気持ちを引き締め取り組んでいきたいと思っています。作り手の思いが読者のみなさんに届いて

いるかどうかは、読者のみなさんだけが判断できるものです。今回はこの最終ページに、アンケートを兼ねて「読者クイズ&プレゼント」を企画しました。是非たくさんのご応募とご意見をお待ち致しております。

景気の低迷を反映して、和歌山の地元メディアも縮小傾向にあります。本誌も広告収入のない無料誌ですが、地域の活性化に貢献させて頂けることを喜びに、よりよい誌面作りがんばっていきたくと思いますので、本年もよろしくお願ひ申し上げます。

第4号編集長 岡 京子



株式会社ウイング／一般商業印刷物の企画・デザイン・製造を主体とし、情報化サービスや印刷付帯サービス、さらにデジタルメディアなどの活用を視野に入れた「新しい印刷業」を目指している企業です。2010年6月、弊社は設立30周年を迎えます。創業より皆さまに支えていただきましたこと心より御礼申し上げます。30周年特別キャンペーンを企画しています。2010年1月中旬(予定)に弊社ホームページにてご案内いたしますのでお楽しみに。〔沿革〕創業1972年。設立1981年。2005年に中央印刷株式会社から株式会社ウイングに社名変更。本社、和歌山市堀取。従業員56名。

【お問い合わせ先】 ☎0120-13-6700 <http://w-i-n-g.jp>

ウイング 和歌山

